

華々しく 奏でる個性

大阪の春を彩るクラシックの祭典「第53回大阪国際フェスティバル」。今年の注目は、在阪の四つのオーケストラを同じ日に聴き比べてしまおうという前代未聞の企画だろう。一夜限りの「夢の響演」を前に、井上道義、飯森範親、藤岡幸夫の3指揮者が顔をそろえた。話し合いと探り合い、笑い合い、突っ込み合いの応酬の末にまとまった願いは一つ。「関西の音楽界を元気にしたい」という熱い思いだった。

聴き比べの好機 ■街は文化あつてこそ

藤岡 はつきり言っている企画、かなり緊張します。大阪ならでよいね。
飯森 大学のとき、何度もレッスンを覚えてもらった井上先生の胸をお借りしよう。
井上 サッチー(藤岡)とは昔からの友達です。
井上 企画は企画として、お客さんが来てくれるかどうか心配だけど。
飯森 そのとおり。
井上 四つのオケの違いが出るかどうか心配。だから本当は、同じ作曲家の、同じ曲を……。

大阪4大オケ響演 指揮者トーク

■4大オケの指揮者の略歴

井上道義 (68) 大阪フィルハーモニー交響楽団首席指揮者 愛称はミッキー。自宅ではアヒルの「マヒル」を飼っている
飯森範親 (51) 日本センチュリー交響楽団首席指揮者 趣味は鉄道模型づくり、日本画。映画「おくりびと」に出演も。博多在住のタイガースファン
藤岡幸夫 (52) 関西フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者 趣味は水泳、国産車のミニカー集め。ザ・ピーナッツのファン
外山雄三 (83) 大阪交響楽団ミュージック・アドバイザー(2016年4月から) 「管弦楽のためのラプソディー」の作曲などでも知られる。現在は八ヶ岳に住む

藤岡 やだなあ。ぼくだけアウトローなんです。系列的に、戦後の音楽教育の大家だった(斎藤秀雄先生とは縁がない。異端児というか)。飯森 井上先生も結構異端児だから。
藤岡 それは知ってるよ。でもホテルで会った話して下さったり、演奏会を聴いて見たり。
井上 大阪に四つのオケがある意味を考えよう。それぞれに違いがあれば、ぼくは一つでもいいと思います。藤岡 半分冗談でおっしゃ



カメラに向かってポーズをとる指揮者の(左から)藤岡幸夫、井上道義、飯森範親＝大阪市北区のフェスティバルホール、豊間根功智撮影

「ランスへの旅」に夢中

巨匠・ゼツダ迎え 音楽稽古

ロッシーニの隠れた傑作とされる歌劇「ランスへの旅」。大阪国際フェスの幕開けを華々しく飾るこの作品の音楽稽古が、大阪府豊中市の大阪音楽大学で進んでいる。



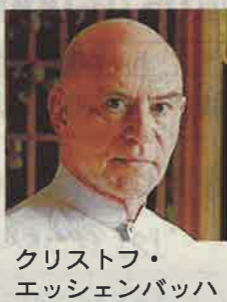
アルベルト・ゼツダ(右)と石橋栄実＝大阪府豊中市

1月下旬、学内にある本格的な歌劇場「ザ・カレッジ・オペラハウス」に、イタリアの指揮者アルベルト・ゼツダの姿があった。ロッシーニ研究の第一人者で、ミラノ・スカラ座の芸術監督なども務めた巨匠。今回タクトを振るにあたり、みずからオーディションに立ち会った歌手陣との初顔合わせに臨んだ。ゼツダはロッシーニ生誕の地、ペーザロで毎年開かれる「ロッシーニ・オペラ・フェスティバル」の芸術監督でもある。多くの一流歌手たちがここから世界へ躍り出るのを長年見続けてきた。

そのゼツダを驚かせたのが、主役の一人で舞台となる温泉宿のおかみ、コルテーゼ夫人役の石橋栄実だ。大阪音楽大准教授で、関西を代表するソプラノ。稽古の段階から、圧倒的な実力をみせており、「歌い手にとって夢のような時間。休憩時間もつづいてレッスンをする先生の姿勢に学ぶことは多い」と話す。また、主要キャストの即興詩人役の老田裕子にもゼツダは舌を巻く。「皆さん、大変すばらしい。とても音楽的に勉強しているし、しっかりと、厳しく教えているが、夢中になって受け止めてくれるから毎日満足している」。87歳の巨匠は興奮気味に話す。



ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団©Terry Linke



クリストフ・エッセンバッハ ©Eric Brissaud

ウィーン・フィル、32回目来日 率いるエッセンバッハに注目

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が、32回目の来日を果たす。率いるのは、名指揮者として存在感も増すポーランド生まれのクリストフ・エッセンバッハ。今回は、モーツァルトのピアノ協奏曲第23番を弾き振る注目のプログラムだ。

カラヤンやジョージ・セルの薫陶を受けたエッセンバッハは、30代で指揮者へと華麗なる転身を遂げる。1970年代以降、オペラにも進出し、ザルツブルク音楽祭やバイロイト音楽祭にも登場している。現在は、ワシントン・ナショナル交響楽団とジョン・F・ケネディ・センターの音楽監督を務める。ウィーン・フィルとの来日は、2011年のアジアツアー以来。4月にはヨーロッパツアーも予定されており、強い信頼関係がうかがえる。

井上 当日のゲネプロ(舞台稽古)は大いに期待するなあ。オーケストラの人ってなかなかほかのオケを聴かないし、自分のオケも聴かないよ。これにはものすごく驚く。でも今回は、みんな聴くと思うな。
飯森 音大生が本当に聴かないですからね。
井上 ぼくはブラームスの四つのシンフォニーをやったから、と提案したんですけど、つぶれました。
藤岡 それはシビヤ。
井上 シビヤなことをやるうって言ったのに。途中で逃げたな!
藤岡 逃げていないですよ。いま聞いてシビヤだと思ってただけ。何番やりたいですか。
井上 1番以外だな。
藤岡 範親は?
飯森 4番。
藤岡 ぼくも4番だな。で、実際は黛敏郎さんのバレエ音楽「BUGAKU(舞楽)」にしました。邦楽器を使わずにあれだけの世界をつくる。すごい傑作です。それに一つは日本人の作品をとりあげたい。
井上 あ、失礼しました。今回は、それぞれのオケが、個性を出せると信じた曲を選んでいくというところで、またやりましょう。
飯森 先生、まだ終わっていないのですから。(構成・谷辺晃子)